

HIRAKU SUZUKI



2023年10月フランス南部のケリュにて Photo by Victoria Palmer

ドローイングが拓く未知の領野との対話

ドローイングと言語との関係を主題に、平面・彫刻・映像・パフォーマンスなどを手がけ、ドローイングの概念を拡張する制作活動を展開している鈴木ヒラク。自身のドローイング論集刊行と合わせて群馬県立近代美術館で個展を開催中の作家に、近況とともに制作をめぐる思考の一端を聞いた。

岡村恵子(東京都現代美術館学芸員)=取材・文 Interview & Text by Keiko Okamura

鈴木

本ヒラクは、コロナ禍中に約1年をかけて自身の作家活動の核を成す思考を編みまとめ、先ごろ単著『DRAWING ドローイング 点・線・面からチューブへ』(左右社)として上梓した。6章にわたり、多様な参照点を織り込みながら綴ったのは、「ドローイングとは何か?」という問いであり、いかにその概念を拡張しうるかをめぐる議論である。「書きながら考えたとも言えるが、より正確に言えば、書くことそのものが考えることであり、思い出すことであり、韻を踏むことであり、散歩すること、遊ぶこと、生きること、つまりドローイングすることだった」と、あとがきで鈴木は綴る。

美術においてドローイングとは、一般的には絵画の下絵や習作としてのスケッチを想起させる。しかし、鈴木にとつてのドローイングは、線を描く行為であるとともに、思考方法であり、世界に感応する態度のことでもある。

言葉が必要だった

宮城県生まれ。2歳からは神奈川県に育つ。バブル経済とその凋落を背景にサブカルチャーが未分化な磁場をかたちづけていた1980年代末〜90年代に10代を過ごした。音楽から始まり、ライブハウス等でのドローイング・パフォーマンスや、各地を旅して路上のマンホールのふ

たに刻まれている記号を足でフロッタージュした作品、剥がされたアスファルト上に残る白線の断片を再配置してつなぐ「Road Sign」、並べて土に埋めた落ち葉の葉脈のみを掻き出して「筋の線」として見出す「Bacteria Sign」、都市や自然の中で採集したおびただしい数の匿名の記号をA4のコピー用紙に記録し続けた「E-Z-Z」など、領域横断的で実験性に富んだ活動を、自身の感覚が導くままに続けた。

「いろんなことをしていたけど、僕は自分がやっていることが長いあいだわからなかったんですよね。何か重要なことをしているはずだとは思っていたものの、ただ実験を続けていきながら、

どんどん闇のなかを掘り進んで、それがなんの積み重ねにもなっていないと感じるのはすごく苦しい。結構、危機的。ギリギリだったと思う」。

武蔵野美術大学造形学部映像学科を卒業した2001年以降もアルバイトをしながら、独自に活動が続けていた鈴木が、2006年春に、改めて東京藝術大学大学院に入ったのは「奨学金を取りたかったから」だったと本人は言う。だが、指導教授の伊藤俊治が持つ幅広い知見に触れたら、自身で多くの本を読んだりしつつ、この頃あえて理論的な文章を書くトレーニングを重ねるようになったのも、そうした先の見えない営みのなかで、「生きてい

考えてみれば地球も一つの石みたいなもの。
隕石や彗星は空間を移動しながら光の線を描いてきた

くためには言葉が必要だ」と切実に感じたからだ。

2008年ごろ、個展に向けステートメントを書くにあたり、鈴木が見出したのが、「ドローイング」という言葉だった。「初めて解放されると同時に焦点が合いました。『ドローイング』としてとらえ直すことによって、バラバラに行っていたことすべてが意味を持ち、何も無駄なこととはなかったと思えるようになった。自分がやってきた道がつながっていることがわかったし、さらに掘り進んでいっていいんだということがわかった」。ちょうど30歳になろうとしていた。

活動をめぐる地図

鈴木がプレゼンテーションの機会にしばしば提示する、活動を体系化したダイアグラムがある。ドローイングを中心に、その周囲に壁画、彫刻、映像、パフォーマンス

ンスなど、自身が実践してきたアウトプット形式が配され、それらが呼応し合うように、往還を示す記号¹⁾でつながれている。

さらにその外周を囲むのが書や禅、哲学、人類学、文学、現代美術、先史美術、環境音／実験音楽といったドローイングと関わるの深い周辺領域であり、併せて今回の単著でも参照されるロジェ・カイヨワ(社会学者・哲学者)、ティム・インゴルド(人類学者)らの思想家や関連する数々の作家らの固有名詞が補われる。なかでも2つの極を成すように上下に配置されている考古学と宇宙科学は、鈴木ヒラク作品の主たるインスピレーション源と言えるだろう。

これは鈴木自身が探究の日々を通じて書き表した地図なのである。この地図の「解像度」は、実践の旅を重ねるほどに上がり、さらに、探るべき未知の領野が広がるのだ。

銀色の飛沫

単著執筆に並行して準備してきた群馬県立近代美術館での個展「鈴木ヒラク『今日の発掘』」では、磯崎新の設計により1974年に竣工した同館に、増築というかたちで付け加えられた現代美術棟のうち2室とこれを常設展示と連結する通路が割かれた。

第3室側からアプローチして最初に目に入る白い壁面には、径にして約15センチほどの2つの石が寄り添うように取り付けられている。周囲の壁にまばらに飛び交っているのは銀色の飛沫。そのランダムさはスプレー缶の底に開けた穴から塗料を放出させることで瞬発的に生み出されたものだ。時間をかけて石をかたち



「鈴木ヒラク『今日の発掘』」展より、第4室の様子。手前と奥に見えるのが「Constellation」シリーズ、左右の壁面が「Interexcavation」シリーズ
Photo by Ooki Jingu

づくってきた匿名の力に思いをはせるなら、その周囲に人為的に制御された静かな線をまどわせるわけにはいかなかったのだろ。石との共作とも言えるこの壁画を鈴木は「岩宿遺跡の印象」(2023)と題している。幼少期から身近にあった発掘現場に関心を持って以来、鈴木は好んで世界各地の遺跡を訪れリサーチしてきた。群馬県内には多数の遺

跡があり、なかでも岩宿遺跡は、日本で最初に発掘された旧石器時代の遺跡なのだそう。

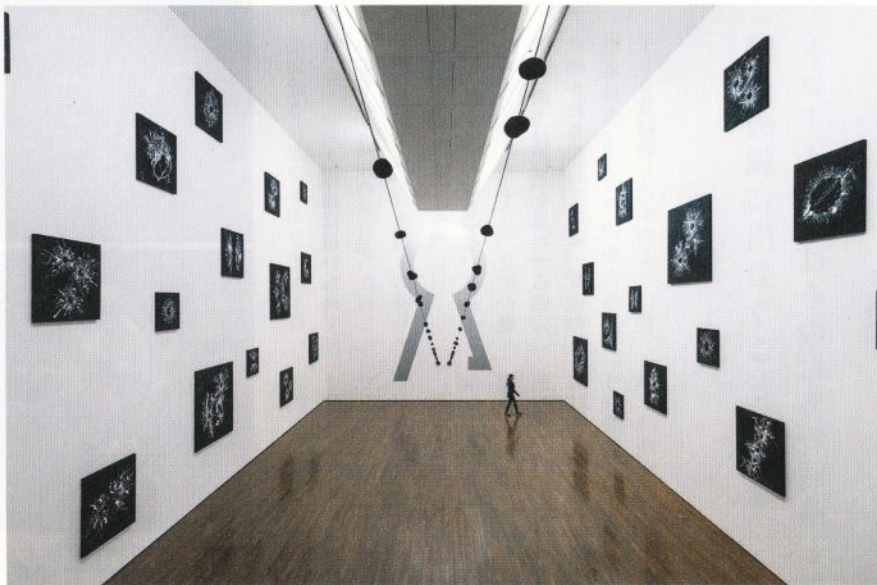
続く第4室には、墨や土を施した黒地のキャンバスに、銀色のスプレーとマーカーで描かれた線が星座を成すような「Constellation」シリーズ(2018-21)、さらには体内の臓器を想起させる赤褐色の下地に同じく光を反射する銀色の塗料で架空の文字や記号あるいは何か生命のなものの痕跡が見出される「Interexcavation」シリーズ(2019)と、近年の代表的な作品が連作として展示され、洞窟のような密度の高い空間をかたちづかった。

隕石と鍵穴

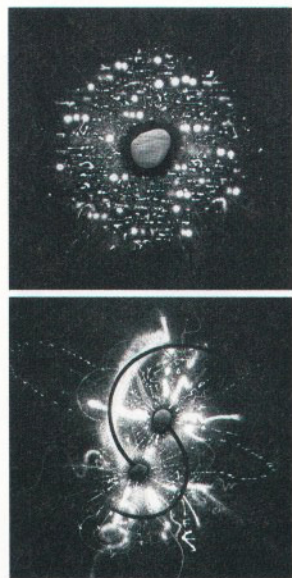
今回とくに印象的なのが、次の第5室である。高さ10メートルという、ヒューマンスケールを優

に超える大空間の、向かい合う左右2つの側壁に、大小40点のキャンバスから成る「隕石が書く」シリーズがランダムに配されている。アクリル絵具と土を施した黒色の下地の上には、丸みを帯びた多孔質の溶岩が1個あるいは複数個配され、それらの石の内から放たれたエネルギーをかたどるようにシルバーマーカーによる点描や記号、あるいはスプレーによる飛沫が周囲を取り巻く。同シリーズは、「石と対話するように描いた作品」と鈴木は言う。「その溶岩が星のように見えた。考えてみれば地球もひとつの石みたいなもの。隕石とか彗星は空間を移動しながら光の線を描いてきたわけだから」。

前後に相対するもう2面の壁には、大きな鍵穴形の記号が直接シルバー塗料で描画されており、そのスケールに目を奪われる。2つの壁をつなぐように空間中



「鈴木ヒラク『今日の発掘』」展より、第5室の様子。左右の壁面に見えるのが「隕石が書く」シリーズ、奥の鍵穴のような壁面と空中に連なる溶岩によるインスタレーションは「観音山古墳の印象」 Photo by Ooki Jingu



上——隕石が書く(S/S) #5 2023 キャンバスに溶岩(ボルト止め)、シルバーインク、土、アクリル絵具 73×73×9cm
下——隕石が書く(S/M) #16 2023 キャンバスに溶岩(ボルト止め)、シルバーインク、土、アクリル絵具 117×117×9cm
Photo by Chen Hsin Wei

央に渡された2本のワイヤーには、キャンバス作品に用いられているものと同様の溶岩が、直列した惑星か、あるいは楽譜上の符号のように配されている。

《観音山古墳の印象》というタイトルが示唆するように、正面の壁画は、前方後円墳を思わせる鍵穴状のかたちをしている。背面の壁画はちょうどそのかたちが180度回転したかのように逆

さになっており、方形に当たるべき位置には、この建築空間の特徴でもある天井採光のための梁部分がちょうど符合している。

観音山古墳は、群馬県立近代美術館の北(高崎市南東部)に現存する、長さ100メートルもある前方後円墳である。「古墳というのは天と地が反転する鍵穴のような場所なのではないか」。同遺跡を訪れ、構造に天文学が取り入

れた石室の中に入り、開かれた空へと続く丘を登った鈴木はそう感じたのだと言う。

鍵穴に引かれる理由を問うと、「鍵穴を覗き込むと向こう側が見える。鍵穴は空間と空間のあいだにあつてそれらをつなぐ通路でもある。ピタリ鍵穴に合う鍵

を見つけ、それがかみ合うことで、世界が変わる瞬間が生まれる。そんな期待もあつて」と応じた。試みに2本のワイヤーのあいだに入って巨大な鍵穴を見上げると、知らずして自分の身体が鍵と一緒に回転するかのような不思議な身体感覚を抱いた。

くしくも15年前のステートメントでも鈴木はこう述べている。「作品自体がまた、私を含む見る人の目にとつての鍵穴となり、

そこから新しい外を覗くことができればいい」。鈴木の見出した鍵穴を通して見えない鍵を回すとき、内と外、天と地、過去と未来、不可視のものと可視のものとは反転する。

ドローイングと対話

鈴木は、自身が見出したドローイング観とその実践で、国内のステレオタイプなドローイング観を更新することが容易ではないことに歯がゆさを覚えるいっぽうで、欧米では、ドローイングを拡張してとらえ直す新しい動きがあることを知る。2009年ごろからは、様々な機会を利用してほとんどの時間を国外で過ごし、間近にその動向を見て、時に参加し

野生の線に出会うこと。 ドローイングはそのための回路となる

「鈴木ヒラク『今日の発掘』展より、左右の壁に見えるのが、東京藝術大学でのワークショップの記録『自然のマーカ―』。枝をシルバーのインクに渡し、枝を「使う」のではなく「通して」線を引くことを試みた
Photo by Ooki Jingu



てきた。しかし、欧米の文脈では、アジアはもとより、アフリカ、中南米などの文化や感性が、正當に位置づけられていないことに次第にもったいなさを覚えるようになり、「そのギャップを埋め、交通を生むことはできないかと考え始めた」。

そうした試みのひとつが、ドローイングの新たな研究・対話・実践のための実験室として、またそれらを記録して共有するための国際的なプラットフォームとして立ち上げた「ドローイングチューブ」である。ロックダウン中には、世界中の友人たちがどういう線を描いているかを集め冊子にまとめた。2020年から行っている「ドローイング・オーケストラ」では、複数名の「かき手」が音や映像要素も交えつつ、相互に関与し響き合いながら「同時にかく」試みを実現した。

「対話とは、一言で言えば『あい

だ』の創造行為である」。鈴木は、単著の最後の章を「ドローイングと対話」と題し、そのなかで近年携わっている教育活動についてもふれている。そこには教えることと学ぶことの循環があり、教育も自身にとつてのドローイング実践のひとつだと言う。

現代美術の知識を頭に詰め込むかわりに、学生たちに、「一度」旧石器時代に戻って「感覚と思考を開いていくことを促す。例えば採取してきた枝や小石を「使う」のではなく、それと「ともに」あるいはそれを「通して」線を描

くことを伝える。「世界を素材としてとらえるのではなく、むしろ自分がその世界の一部であると気づくこと」が大切なのだ。

展覧会タイトルの「今日の発掘」とは、世界と対話し、日々見知らぬ線に出会うことへの希求を思わせる。他者(人間だけではなく)の線に学び、自分が描いたとは思えない「野生の線に出会うこと」「ドローイングはそのための回路となる」。

■ HIRAKU SUZUKI

1978年宮城県生まれ。2008年東京藝術大学大学院修了。これまでに森美術館(2010)、グロツワフ建築美術館(ポーランド、2015)、銀川現代美術館(中国、2016)、MO.CO. Panacée(フランス、2019)、東京都現代美術館(2019-2020)などの展覧会に参加。作品集に『SILVER MARKER—Drawing as Excavating!』(HeHe、2020)など、著書に『Drawing ドローイング 点・線・面からチューブへ』(左右社、2023)がある。

■ INFORMATION

鈴木ヒラク

「今日の発掘」

9月16日～12月19日。群馬県立近代美術館で開催。最新シリーズ「隕石が書く」40点による大規模なインスタレーションと、近作である『Constellation』『Interexcavation』の各シリーズ、そして現地制作される壁画などを組み合わせた、作家にとって過去最大規模の個展。企画は同館学芸員の田中龍也。

*1——「TEAM IT 鈴木ヒラク NEW WAVE」展 財団法人東京都歴史文化財団トキョーワナダーサイト、2008 カタログ、15頁